

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

近代社会の指導者崇拝に関する人類学的アプローチ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000823

序論 近代社会の指導者崇拝に関する人類学的アプローチ

韓 敏

国立民族学博物館

本報告書は、2008年3月24日～25日に国立民族学博物館で実施された研究フォーラム「近代社会における指導者崇拝」(代表：韓敏)の成果である。文化人類学や歴史学の視点から、近代国家の形成過程に見られる指導者の個人崇拝という社会的・文化的現象に焦点をあて、中華人民共和国、中華民国、モンゴル、ルーマニア、西アフリカのガーナとコートジボワールの事例を通して、個人崇拝を生み出す文化的・宗教的・政治的背景を分析し、複数の地域と異なる社会体制の比較研究をすることで、近代社会における指導者崇拝の動態と本質を見出そうとするものである。

1. 指導者崇拝——20世紀の近代国家における文化的、政治的現象

個人崇拝とは特定の人の一部の人びとに崇拝される行為またはその様式である。英雄崇拝、祖先崇拝を含む個人崇拝は人類の歴史において普遍的に見られる文化的現象である。20世紀に入り、ある政党、軍あるいは政権の創設者や指導者に対する個人崇拝の現象は、複数の社会の中で観察することができる。

20世紀前半、第1次と第2次の世界大戦により、各地で独立運動、民族運動が勃興し、独立国家、近代的国民国家の建設がアジアとアフリカの政治的主流となった。一方、20世紀後半、とくに最後の20年間は、近代資本主義のグローバル化の時代であり、資本主義の近代化のオルタナティブとしての社会主義の理論、運動と政権が出現し、挫折した時代でもあった。これらの独立運動、国民国家の形成、資本主義のグローバル化、あるいは社会主義政権の出現と発展の過程において、一政党あるいは一国の創設者や指導者をカリスマ的存在として崇拝するのは、20世紀によく見られた現象である。世界で初めての社会主義政権として誕生したソ連の創設者であるレーニン (Velikanova 1996; Tumarkin 1997)、国民党政権、中華民国の創設者である孫文 (陳 2009)、共産党政権、中華人民共和国の創設者である毛沢東 (韓 1996a, 1996b, 2005; Han 1997)、モンゴルのスフバートル、ベトナムのホーチミン (Tai 1995) とアフリカ独立国家の指導者たちに対する崇拝は、その例である。すなわち、ある人物を用いて党やネーションをシンボル化するのである。この意味で国民国家の建設 (nation-building) は新たな英雄作りの過程であるともいえる。そして、ソ連のレーニン、三民主義の提唱者である中華民国の孫文、中華人民共和国の毛沢東のような人物は、党や政権のみならず、ある思想、あるいはイデオロギーのシンボルとされることもしばしばある。また、多民族国家の形成過程の中で、ある民

族の指導者がその民族の人びとによって崇拜されるケースも見られる。中国内モンゴルの人びとが彼らの指導者であるウランフに対する崇拜はその例である (Bulag 2002)。

20世紀の個別の指導者崇拜について、これまでにいくつかの研究が行われてきた。たとえば、ソ連のレーニン崇拜に対する北テキサス大学の歴史学者、ベリカノバ (Velikanova 1996) やウェルズリー大学タマルキン (Tumarkin 1997) の研究、中華民国の孫文崇拜に関する南京大学陳氏の研究 (陳 2009)、ベトナムのホーチミン崇拜に関するハーバード大学のタイ氏 (Tai 1995) と、中国内モンゴルのウランフ崇拜に関するケンブリッジ大学ブラグ氏 (Bulag 2002) の研究は、いずれ歴史学の視点からのアプローチである。それ以外に筆者によって聞き取り調査とフィールド調査に基づいた人類学的研究もある (韓 1996a, 1996b, 2005 ; Han 1997)。

しかしながら、上記で挙げられたような研究は、個別の国家、あるいは個別の社会における指導者崇拜の現象に関する研究であり、しかもこれらの指導者崇拜に関する歴史学、人類学的研究は、20世紀の歴史的、文化的現象としてとらえる視点が欠けていると言わざるを得ない。

本書は、上記の指導者崇拜への歴史学、人類学的研究の成果を活かしながら、新しい試みをしようとする。すなわち、本書は、近代国家の指導者への個人崇拜は20世紀の歴史的、通文化的現象であるという仮説をたてることによって、地域、政治体制を越えた比較の視点から、中国、モンゴル、ルーマニアと西アフリカの国で観察された指導者崇拜の現象を考察する。

20世紀に起きた近代国家の指導者崇拜は、人類の長い歴史の中でよく見られる英雄崇拜と関連している。英雄崇拜は、超自然的素質をもち、それらを用いて人類、とくに自分たちの集団や社会にとって有益とされる行為を行うものとして、崇めることをいう。20世紀の指導者崇拜は、通文化的現象である英雄崇拜の近代版と筆者は考えている。イギリスのカーライル (T. Carlyle) によれば、英雄とは歴史に指導的影響力を振るう個人であり、それは天から彼らに課された義務である。英雄は神、予言者、詩人、僧侶、文人、帝王などさまざまな姿をとる (カーライル 1949)。このような英雄崇拜は、旧大陸の古代文明地域、その影響圏など世界各地で広く見られ、ギリシアのオイディプス、テセウス、ローマのロムルス、ゲルマンのジークフリート、東北アフリカのシルック族のニイカンダ、マケドニアのアレクサンドロス大王、モンゴルのチンギス・ハーン、高句麗の朱蒙、日本のスサノオノミコト、中国の堯・舜・禹、関羽などは、その代表例である。英雄崇拜は、過去の歴史的現象だけではなく、現代でも起きている。独立運動や国民国家の形成過程において、一政党あるいは一国の創設者や指導者を英雄として崇拜するのは、20世紀によく見られる現象である (韓 2014 : 216-217)。

本書は具体的に以下の3つの課題を明らかにしていきたい。

まず、中国、モンゴル、ルーマニアと西アフリカの国々における指導者崇拜を生み出

す文化的・宗教的・政治的要素を分析する。次に、指導者崇拜の実態と形式を整理して、国民国家建設後の指導者崇拜の行方やグローバル化時代の個人崇拜の変容を検討する。最後に、比較を通して、20世紀における指導者への個人崇拜に関する理論的構築を試みる。

2. 複数の地域と異なる社会体制からの比較

人類学と歴史学出身の5名の執筆者が中国、モンゴル、ルーマニア、西アフリカのガーナとコートジボワールの事例を通して、指導者崇拜と近代の国民国家形成との関連性、グローバル化時代に入ってからの指導者崇拜の変化を取り上げ、近代社会の指導者崇拜の動態と本質を見出そうとしている。

第1章において、陳蘊茜氏が中華民国の成立過程における孫文の個人崇拜について、崇拜発生の歴史的原因、崇拜の形態とその機能を分析した。1920年代の民国初期、各地の軍閥復活によって革命党（のちの国民党）政権が弱まった状態の中で、亡くなった孫文は中華民国の国父と見なされ、党、政権および国の求心力として国民党の政権によってトップダウンの崇拜が推し進められた。陳氏は、記念日、記念堂の建設、町と広場の命名、肖像の配置などに注目して、近代国家における時間、空間の編成と孫文崇拜とを関連させて分析した。その結果、孫文崇拜は、国民党の内部統合、国家意識の確立、中華民国アイデンティティの確立、のちの抗日戦争における民衆動員や中国統合にも一定の役割を果たしたと陳氏は、結論した。

第2章において、韓敏は、中華人民共和国創設者である毛沢東崇拜の形成を、1930年代にさかのぼり、歴史学、政治学と人類学の文献調査および史跡の現地調査を通して、毛のもつ軍事的、理論的カリスマ性を分析し、中国共産党内部で生み出された指導者崇拜が、一般社会に浸透したプロセスを考察した。毛沢東崇拜は、社会主義近代国家の形成と中国ナショナリズムの台頭の中で形成された現象であり、そのなりたちには、軍事的、理論的カリスマ性が欠かせなかった。毛の軍事的カリスマ性とは、彼が主導した、中国の事情にあった農民運動と土地革命を重視し、いくつかの危機を乗り越えた彼の軍事的戦略と戦術のことを指す。毛の理論的カリスマ性とは、マルクス、レーニン主義を無条件に受容し、ソ連やコミンテルに一辺倒しがちの一部の中国共産党の幹部たちとは違って、中国の社会的状況にあった農民運動や土地革命の実践は、マルクス・レーニン主義に対し、新たな理論的挑戦を行った。つまりマルクス主義の中国化が毛沢東のカリスマ性を生み出す源泉であり、また毛沢東崇拜が生成するメカニズムでもあると韓は結論した。

また、党内の毛沢東崇拜が一般社会へ伝播されたプロセスについて、紙幣、切手、刊行物などのメディアによる肖像の大量使用、公的な場における題字と民謡の表象、外国

人記者による自伝や記事の刊行などを考察し、これらのメディアは、毛のカリスマ的指導者のイメージを一般社会にある程度拡大再生産する機能を果たしたと指摘した。

第3章において、ナサンバヤル氏が、モンゴル国と中国という2つの国民国家の形成過程に出現した、モンゴル国の英雄とされるスフバートル (Sükhbaatar) と、中国内モンゴルの民族英雄とされるウランフ (Ulanhu) について比較した。スフバートルはモンゴル国において国家の独立と主権の見地から評価され、崇拝されているのに対して、中国内モンゴルの指導者であるウランフは、中華民族の政治的枠組みの中で中国政府に評価され、ウランフ記念館 (愛国主義教育基地)、映画、銅像、切手、文学作品などの形で記憶されている。一方、内モンゴル族の間では、自治区の実情に適した民主改革、民族言語の保護、モンゴル民族としての未来設計などの視点からもさまざまな評価が行われている。また、近年、モンゴル国と内モンゴルにおいてはチンギス・ハーンというシンボルを用いて新しい民族文化を創りだし、表象する傾向があることをナサンバヤル氏は述べた。

第4章において、新免光比呂氏は、ルーマニアの2人の指導者、コドレアヌ (Corneliu Zelea Codreanu) とチャウシェスク (Nicolae Ceaușescu) に焦点を当てて、世界資本主義の大恐慌による社会的危機を背景にもつレジオナル運動と、重工業化と集団化を中心とするもう1つの社会主義近代化の過程に生まれた2つの個人崇拜の成り立ちを取り上げた。ルーマニア近代における個人崇拜の連続性を、ナショナリズム、カトリックの伝統、特に司祭と農民の関係性と結びつけて分析した。

第5章において、竹沢尚一郎氏は、ガーナの理想主義の政治家ンクルマ (Kwame Nkrumah) と、コートジボワールの現実主義の政治家ウフェ＝ボワニ (Félix Houphouët-Boigny) の事例を挙げながら、西アフリカの指導者崇拜とナショナリズム、パンアフリカニズムとの関連性を取り上げた。また、竹沢氏は西アフリカの独立運動時に爆発的な人気を得た指導者たちを現実主義と理想主義の2つのタイプに分類した。強い国家作りを目指す前者の現実主義の政治家は、対外協調主義の立場をとり、経済的・軍事的支援をしてくれる旧宗主国を含む外国勢力と連携して、死ぬまであるいは引退まで、数十年の支配を可能にした。それに対して、後者の理想主義の政治家は、政治的独立を優先させ、植民地支配に抗するイデオロギーとしてパンアフリカニズムを掲げた。彼らが国民各層から高い人気を獲得するのは (指導者が崇拜の対象となるのは)、彼らが国家建設と国民統合に大きく寄与していると判断されたときであろう。その意味では、現実的な政治家より、理想主義的な政治家のほうが、シンボルとしては操作しやすいはずであると竹沢氏は指摘している。

3. 指導者崇拝の共通点

本書で扱われた指導者—中華民国創設者の孫文、中華人民共和国の毛沢東、モンゴルのスフバートルとウランフ、ルーマニアのコドレアヌとチャウシエスク、ガーナのンクルマと、コートジボワールのウフェ＝ボワニたちの指導者崇拝を比較してみれば、ナショナリズムとの関連、指導者自身のもつカリスマ性、政党の内部から一般社会へと浸透するパターンなど、いくつかの共通点が見られる。

3.1 指導者崇拝の温床—ナショナリズム

1つ目の共通点は、崇拝された指導者たちは、20世紀に現れたナショナリズムと関連して、ネーションのシンボルとなる点である。例えば、1930年代の中国において、中国共産党は抗日救国ナショナリズムを全面的に強調して、ゲリラ戦を展開するなかで勢力を急速に拡大した。その中で毛沢東のカリスマ性が日本との戦争状態、国家危機の中でさらに強調された。孫文崇拝も、中華民国の国家意識の確立、国民のアイデンティティの確立、のちの抗日戦争の民衆動員につながった。

それに対し、ルーマニアのチャウシエスクは、自身をルーマニアの歴史の英雄の1人として位置づけていた。人間の神格化をすることがないカトリック文化のなかで、ルーマニアの英雄崇拝は常に民族や国家の偉大さや優秀さにつながっている。

すなわち、20世紀の指導者崇拝の形成の要因として、外部の要因によって高まるナショナリズムの要素が欠かせないといえる。そのため、崇拝された指導者たちは、外部に対し、その民族、政党、国家の自律性と強さを示すヒーローとして示され、内部に対し、求心力として民族的英雄として讃えられることになる。その意味で20世紀に高まってきたナショナリズムは近代社会の指導者崇拝を生み出す温床であるといえる。

3.2 カリスマ性

2つ目はカリスマである。カリスマ (Charisma) は、もともとギリシア語で、神の賜物を意味する言葉である。超自然的、超人間的な力をもつ資質を意味する。

ウェーバーは人間社会における支配の正当化について、カリスマ的支配、合法的支配および伝統的支配の3類型を提示した。また、カリスマ的存在について、預言型、呪術型、危機回避型と救済型があると指摘している (ウェーバー 1996)。カリスマが「あらゆる価値序列を逆転させ、習俗、法律および伝統をくつがえすような、革命的性格」(ウェーバー 1996 : 370-467) を帯びるものであり、被支配者・被指導者は支配者・指導者のカリスマ的資質に絶大の信頼を置いて服従・帰依するのである。カリスマを作り出す源泉には、軍事、雄弁、預言と呪術などの要素が考えられ、さまざまな社会情勢の中で発揮される。20世紀における独立国家や近代的国民国家の創設という大きな社会的転換

の中、伝統的価値観、習俗、法律をくつがえすような、革命的性格をもつカリスマ的人物が必要とされると同時に、新しい政党や政権にとっても、強力な誰か、あるいはシンボルをもちいて、その政党やネーションの理念と存在を具現化するのが、必須作業でもある。本書で取り上げられている8人の指導者の中で、内モンゴルのウランフを除き、残りの7人は、いずれも救済型、危機回避型のカリスマ的存在であり、軍事的・民族的英雄とされている指導者たちである。

3.3 政党や政権内部から一般社会へ

3つ目の共通点は、これらの指導者崇拜は、政党、あるいは政権の中で形成され、権力とともに一般社会に浸透していったという点である。たとえば、孫文は、清王朝を倒した民国初期において、国民党によって党のシンボル、中華民国の国父として崇拜され始めたのである。孫文崇拜の機能は、国民党内部の統合にとどまらず、のちの中国統合にも一定の役割を果たして、中華民国の全土に広がった。その場合、時間と空間の再編成による神聖化が伴った。例えば、孫文にちなんだ各都市の中山広場の命名が挙げられる。それよりも顕著な例は、文化大革命時代に、各地都市に限らず、町、農村、学校、職場などにおける毛沢東銅像の建立により空間の神聖化が進んだ。すなわち、記念日の設定、記念堂の建設、中心的広場の命名、公的空間における肖像や題字の大量使用、墓の聖地化、墓参りを国家的行事にするなどの作業を通して、政党や政権のシンボルが一般社会へ浸透されたのである。

4. おわりに — 指導者崇拜の行方

上記の8人の指導者崇拜の事例が示すように、20世紀は、崇拜されたヒーローが輩出した時代であった。一政党、あるいは一国の指導者の個人崇拜は20世紀における国民国家、独立国家の形成、特に社会主義国家形成のプロセスにおいて再現性のある文化的・政治的現象である。その指導者の死、あるいは体制が変わったときに、崇拜された個人がどのように扱われるのか？国民国家形成の初期に出現した指導者崇拜は、国家の安定期、特にいまのグローバル化時代に、どのような変化を起しているのだろうか？

孫文は政党と三民主義のシンボルとして、とくに死後、そしていまでも国民党の中で崇拜されている。毛沢東は、いまでも政党と国家のシンボルとして機能している一方、民衆の間では神格化されている。彼は、現世利益を求める民衆の願望に応えた存在として、記憶され、結果として神格化される。この点は、孫文崇拜とは本質的に異なっている。国民党政権によって始められた孫文崇拜は、ある程度、民衆の間で浸透していたが、終始、政党と政権のシンボルとされていた。つまり、中華民国の国父の孫文は民衆の心の中ではあくまでも「国父」である。孫文崇拜は、国から推し進められた崇拜であるの

に対し、毛沢東崇拝には、国家による崇拝と民衆による神格化の2つのパターンが見られる。毛の銅像、バッジ、肖像入りの護符やストラップなどが一部の人びとの間でお守りとして流通し、毛沢東はいまや神として崇拝されている。

なぜ、孫文崇拝と毛沢東崇拝の行方にこのような違いが生じたのか？ 陝北の民謡『東方紅』の中で、革命者の毛は「太陽」、「救星」という超自然的存在にたとえられた。共産党政権のシンボルが、民衆に超自然的存在として受け入れられた条件として、人びとが求めていた功利性・実用性などを持っていたからである。女性解放、識字運動と土地改革はまさにそれである。毛沢東がいまでも一部の民衆に記憶され、神格化されている理由について、筆者はすでに2005年に次のように指摘した。「毛沢東が農民によって感謝され、記憶され、神格化されている原因は毛沢東が率いた革命の本質によるものである。中国の革命は根本的に農民による、農民のための革命である。革命の一環である土地革命のおかげで、当時、人口の9割を占めた3億の農民が代々望んでいた土地が与えられた。新しい土地証書には共産党政権の象徴である毛沢東の肖像が描かれている。土地を与えてくれた毛沢東は、農民たちにとって数千年にわたって自分達が求めてきたユートピアをもたらした救いの星である。このように、毛沢東の有徳の善行は死後の神格化につながる原因の一つになる」(韓 2005: 543-544)。

また、モンゴルのスフバートルは、23歳という若さの死によって、モンゴルの革命シンボルとされ、神聖化された。彼の遺体が安置された廟は、色は異なっているが、その概観がレーニン廟の形に似ていた。しかし、社会主義ソビエト連邦の崩壊後、モンゴル人民共和国からモンゴル国へ、という政治体制の変化に伴ってスフバートル廟の扱いも大きく変化し、2004年にスフバートルの遺体は典礼に従って仏教僧侶の指揮のもと火葬された。翌2005年には、建物自体も民主化のモンゴルの新しいシンボルであるチンギス・ハーンの記念像を建てるために取り壊された。この事例からは、国や民族が自分たちを象徴するシンボルを作る際に、内部と同時に外部の他者のまなざしも意識し、より広く知られ、より喚起力のあるシンボルを選ぶ傾向があるといえる。社会主義時代のモンゴルでは、チンギス・ハーンの名前を口にするのはタブーであったが、ポスト社会主義時代になると、彼の名前は、モンゴルの象徴として再び登場し、ネーションの偉大さ、優秀さを代表する存在となった。

ルーマニアのチャウシェスクは現在の政権ではどのような意味をもち、民衆にとってはどのような存在なのだろう。1989年のクリスマス、テレビは模擬裁判と銃殺処刑を放映した。さらに、兵士たちによって夫婦のふたつの棺桶がブカレストのゲンセア墓地に埋葬されることも放映された。毎年チャウシェスクの誕生日である1月26日には、何百人もの熱心な支持者たちが墓に詣で、ロウソクに灯をともして革命歌を歌う。このように一部の民衆に偲ばれていることは間違いない。

ガーナの独立運動を指揮し、アフリカの独立運動の父といわれるンクルマは、21世紀

に入った現在、ンクルマ時代を経験した世代には、彼によってもたらされた経済の混乱や独裁政治が想起され、あまりいいイメージをもっていない人びとも多いが、若い世代にはガーナ独立の英雄として、建国の父として人気が高い。現在、彼はガーナ独立の6偉人（ビッグ・シックス：ンクルマ、エマニュエル・オベツェビ＝ランプティ、J. B. ダンカ、エドワード・アクフォ＝アド、ウィリアム・オフォリ＝アタ、エベネゼル・アコ＝アジェイ）の1人として、国家メディアとして機能する紙幣にある集合像の中で記憶されている。それに対し、コートジボワールの現実主義の政治家ウフェ＝ボワニは、1960年に独立すると、政治的には一党独裁体制をとり反対者を弾圧する一方、フランスと緊密な関係を続け、西側寄りの政策を続けた。1980年代までコートジボワール経済は、年率8%の高い経済成長率を実現し、「イボワールの奇跡」と呼ばれ賞賛されたが、1993年のウフェ＝ボワニの死後から現在にいたるまで、ガーナの理想主義者のンクルマとは異なり、アフリカの独立運動の父、もしくは他の尊称で人びとに記憶される傾向がみられなかった。

上記のように、中華人民共和国、中華民国、モンゴル、ルーマニア、西アフリカのガーナとコートジボワールに見られた近代の指導者の個人崇拜を整理し、比較を通して、近代国家という想像された共同体のナショナリズムとの関連性、カリスマ性などいくつかの共通点を見つけた。同時に新たな疑問と課題にも直面するようになっている。指導者崇拜は、近代国家の宿命なのか？それとも当時の社会体制と何らかの関連性があるのか？上記の社会において指導者崇拜が発生したときには、いずれの国でも君主制をとっていなかったのは確かな事実である。また、指導者崇拜は、20世紀初期に限っての歴史的現象なのか？それとも人類の歴史の中で普遍性のある現象なのか？これらの疑問点の提起も今回の研究フォーラムでの収穫である。今後、指導者崇拜と社会体制との関連性について、さらに考察していきたい。

参考文献

(英語)

Bulag, Uradyn E.

2002 The Cult of Ulanhu: History, Memory and the Making of an Ethnic Hero. *The Mongols at China's Edge: History and the Politics of National Unity*. Lanham & Oxford: Rowman & Littlefield.

Han, Min

1997 Tourism in Shaoshan, Mao Zedong's Home Village: From Revolutionary Memorial to Multi-Purpose Tourist Attraction. In S. Yamashita, K. H. Din, and J. S. Eades (eds.) *Tourism and Cultural Development in Asia and Oceania*, pp. 141-163. Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

Tai, hue-Tan Ho

1995 Monumental Ambiguity: The State Commemoration of Ho Chi Minh. In K. W. Taylor and J. K.

Whitmore (eds.) *Essays Into Vietnamese Pasts*, New York: Cornell University Press.

Tumarkin, Nina

1997 *Lenin Lives: The Lenin Cult in Soviet Russia*, Cambridge: Harvard University Press.

Velikanova, Olga

1996 *Making of An Idol: On Uses of Lenin*, Gottingen: Muster-Schmidt.

(中国語)

陳蘊茜

2009 『崇拜与记忆：孙中山符号的建构与传播』南京：南京大学出版社。

(日本語)

ウェーバー・マックス

1996 「カリスマの支配とその変形」『現代社会学大系 第5巻 ウェーバー社会学論集』東京：青木書店。

カーライル

1949 『英雄及び英雄崇拜』柳田泉訳，東京：春秋社。

韓敏

1996a 「中国の観光開発のフロンティア—創出された『地域文化』」山下晋司編『観光人類学』pp. 169-177, 東京：新曜社。

1996b 「中国の観光開発における伝統的文化と毛沢東の観光化」『旅の文化研究所研究報告』4：91-98。

2005 「毛沢東の記憶と神格化—中国陝西省北部の「三老廟」の事例研究にもとづいて」『国立民族学博物館研究報告』29(4)：499-550。

2014 「英雄崇拜」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp. 216-217, 東京：丸善出版。